釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　５

釣りっていいなあ

鹿島釣狂

野営士と町医者

五月一四日の水曜日に休暇を取った。前回、苫小牧西港菱中造船所前で、先に竿を出していた釣り場を明け渡してしまった不甲斐なさを払拭するため、平日のまだ釣り人の少ない日を選んだのだ。幸いにその日の天気予報は雨模様である。更に釣り人が少なくなるだろう。今日こそはあの角の一等地に自分の竿を並べるのだ。

午前三時半に菱中造船所前に到着した。前日からの車が三台あったが、誰も竿を出していない。私はすぐに溝の切れ込んだ板の端っこに竿を置いた。今日はこの場から逃げ出したりしない覚悟だ。軟竿で迷惑をかけてはいけないと、今日はプロサーフＣＸ－Ｔを持参した。もちろんここでは定番のナイロン二号、錘三〇号をそろえ、盗み見したツワモノどもの仕掛けも準備しておいた。前回は当日買った生イソメで、周りに負けまいと踏ん張れば踏ん張るほどイソメが千切れてハリから飛んで行った。今回は前日に購入しておいた生イソメに塩を入念にしておいた。

空が薄明るくなってきた頃、ワゴン車の脇にタラボナアンテナを立てた［野営士］がゆっくりと準備し出した。前回、私が竿を出した丸太でも一人が竿を出した。丸太の竿立ての端に、これも地元の釣り人が立てたポールに、風見鶏の役目を果たす吹き流しが、向かい風を示して強くはためいていた。防波堤の先端でも二人の若者が竿を出した。次に、今年から旭川で開業したという［町医者］がやってきて、私の横で豪快に竿を振った。そして、その竿を前にして今年の願を掛けて柏手を打ち、頭を下げた。この場所での釣りは常連だったらしく、［野営士］と親しく話をしていた。私がここで竿を出すのは初めてだと伝えると、前回の釣りで教えられたここでのルールをひとしきり繰り返された。そして、私を温かく迎え入れてくれるつもりらしい。

野営とはいっても、パラボナアンテナを立てた車内の装備は一級品である。今回はこの中で寝泊まりして一週間を過ごすという

竿はこのように端から順にそれぞれの竿がひしめき合って並んだ。青が私、赤が町医者、白が野営士。最終的にはこの三人の竿だけになった。

地元の釣り人も集まってきて、私と同じ板の切込みに竿が並べられていった。今日は冷え込んだので、ここに集まってくる釣り人達を温めてあげようと炭火を起こしていた釣り人のスピンパワーに糸ふけが出た。竿先がクロガシラの大物を示していたので、ここの新参者である私が掬うべきだろうとタモ網を差し出した。４５㎝ほどのものだった。

その御仁も帰って、入れ代わり立ち代わり地元の人が様子を見に来た。そして「風が強い」「波が高い」と言っては引き上げていった。状況の良い時にいつでも竿を出せるのが地元の強みだ。仕事の途中で来たらしいスーツ姿や会社名の入った作業服姿の人も目に付いた。

一週間寝泊まりしていた［野営士］のスピンパワーにもアタリが出て、タモ網で掬おうと準備したが、３０㎝ほどのもので自分で抜き上げてしまった。その［野営士］のスピンパワーがまたもや動いた。しかし、獲物は付いていなかった。今度はその隣にあった私のプロサーフがピコンピコンと動いた。［野営士］がリールを巻いているときにも大きく動いていたのだが、それは彼の道糸と交差していたせいだろうと思っていたが、そのアタリは本物だったのだ。竿を煽るとグィーン、グィーンと底へ底へと刺さりこむ。相当な大物だ。５０㎝、いや６０㎝はあるだろうか。前回、途中に根があるから休まずに引っ張れという助言があったので、その重量感に負けないようにと懸命にリールを巻いた。バチンと音がした。「煽りすぎだもんなあ。」とタモ網を持って待っていてくれた［町医者］が唸った。煽っていたわけではなく、懸命にリールを巻いていただけなのだ。クロガシラの急な引き込みで煽っていたように見えただけなのだ。

すっかり気落ちしてしまったが、今が活性の上がっている最中だと、急いで二号道糸に二～十二号のテーパーラインを結び直して一本バリの仕掛けに塩イソメをたっぷりと付けて打ち直した。その竿がまたもや動いた。乗った。先程と比べるとずいぶんと軽く、自分で抜きあげられそうだったが、先程のこともあるので［町医者］掬って下さいとお願いした。それでも４０㎝を超えていた。

そしてすぐにその［町医者］が、大物を掛けた。私が掬ったのだが、５０㎝には少し届いていないように見えた。町医者は今年の初釣りで魚を拝むことが出来て本当に良かったと大きな声で独り言を言った。

日が高いところに昇って、その陽気にうとうととし始めてしまった。今日はこんなもんだろう。私は、この場所でツワモノどもに交じって竿を置けたことに満足して引き上げることにした。

貴重な１枚。前回よりも少し身長が伸びた

岩見沢釣遊会第二回大会

五月二十四日（土)、平成二十六年度第二回大会を「とんとん会」との初めての合同大会として、寿都港～蒲原で開催された。前年度より役員レベルで打ち合わせを何度も持ち、お互いの総会を経て今回の運びとなったのである。

釣りバスの中では、お互いの会員が前後に座って、交流が深まるようにと配慮された。そのお陰か、幼少の頃の遠足気分に少し大人の飲み物も嗜んで釣り談義に花が咲いた。バスの中から「動物の飛び出しに注意！」の看板を後方に見やっていると、後ろの方の座席からも熊肉や鹿肉の料理が飛び出してきて、春の香り高い山菜もいただいた。

しばらく暖かい日が続いたので海水温も魚がエサをとることの出来る状況になっただろうか。ホッケの姿もチラホラ見えるようになりアブラコも釣れだしたようだ。そして、大

会当日は、絶好の釣り日和となり大物が期待された。

前回の大会で岡氏から弁慶岬に入るのなら一緒に連れて行ってほしいとの約束を交わしていた。忠義氏も弁慶岬に下りると言うので心強い。灯台からの崖下りの為のロープも用意してくれるという。当日、岡氏と西川氏は、弁慶灯台からの下り口より、距離はあるがなだらかな斜面の方が安全だと山中方面から下りて行った。

忠義氏とともに私がいつも利用している崖の溝を伝って下って行った。私は安全を考えて二度の荷物運びとしたので、忠義氏は先に進んでいったのだが、彼が狙いとしていた場所を外して釣り場を展開していた。そこは、いつも私が入る場所なのだ。私は、今日の一応の狙いとした左先端で荷を下ろした。

二本ともゴロ天秤ネット仕掛けを目の前に見える岩の周りに近投した。そして、一本はソイの曳き釣りを試みようと用意した仕掛けを繋いで遠投して曳いてみた。根掛かりもなく具合はよいと確認してから、先に打っていた仕掛けを回収しようとすると二本とも根掛かりしていた。曳き釣りを準備しているうちに魚が付いて岩穴に潜り込んでしまったのかもしれないと、今度は竿先に鈴を付けて打ち直しておいた。曳き釣りに熱中してしまうとどうしても投げ釣りの竿先のアタリを見るのが等閑(なおざり)になってしまうからだ。投げ釣りの方のアタリは鈴に任して、曳き釣りを続けた。あちこちに打ってみると、根が幾重にも張り出しているのか、思うようにいかない。そのうちに曳き釣りまで根掛かりしてしまった。投げ竿の方も音沙汰なしなので、エサを付け替えるために竿を上げるとやはり途中の根に仕掛けを取られてしまった。今度は、仕掛けを外して錘だけで周辺を探ってみた。一カ所だけ比較的根掛かりが少ないところを見つけたので、そこに集中して二本の竿を遠近投げ分けた。

忠義氏がやってきて、私の打っている方向は、根掛かりは無いが、魚も薄いところだと、違う場所を紹介してくれた。佐々木氏が当初入る予定にしていたところだそうだ。忠義氏は荷物を広げてしまったので、今さら移動してくる気はなさそうだ。私は曳き釣りを止めて、鈴も外して竿二本を遠投に、一本はゴロネット仕掛けで近投し、竿先に集中した。

そこで、ようやく近投にアタリが出た。ちょんちょんとエサを啄(ついば)んでいるようなアタリだ。大事な初アタリをものにしようと、竿尻で構えていたがそのうちにアタリは止まってしまった。大振りに切ったカツオのエサを半分にカットし、塩イソメを合い掛けにして同じところに再度打ち込んだ。しばらくするとまた同じ竿にちょんちょんとアタリが出た。今度は竿を手に持ち、次のアタリを待っているとグックと引き込んだ。上がってきたのはゴロに食いついてきたアブラコの小物だった。遠投の竿に慌ただしいアタリが出た。丸々と太ったホッケがカツオに食いついていたが、なんだか寸足らずだ。

もう、すっかり辺りは明るくなっている。周辺にはサクラマスを狙ってルアー竿を振っている釣り人が三名ほどやってきたが、元気がない。弁慶岬をかわした政泊漁港の平盤に集まっている浮き釣り師の竿も止まったままだ。何度か出たアタリも途中の根に取られて獲物は手にしていない。そのうちにアタリが全く出なくなってしまった。そして、締め切

り間際に、根掛かりの少ないところに打ち込んでいた竿にきたクロガシラを手にしただけで今日の私の釣りは終わってしまった。

帰り道の灯台までの上りは、サクラマスを狙った御仁が下りてきた所を上ったが、ここの方が比較的楽だった。また、通り道も分かりやすいようにと岩壁に張り付いた拳大の石に青いペンキが塗られていた。

どこも根掛かりがひどくて難儀した。

優勝した湯浅氏の魚

今回優勝した湯浅氏は、「とんとん会」幹事長としての責任上、最終地点の蒲原に仲間五人で下り立って行った。ホッケは早いうちから順調に釣れていたのだが、アブラコを取るのに苦労していた。そして、狙いとしていた場所に入っていた仲間が移動していったので、そこに入ってすぐに身長優勝にもなった４６．５㎝のアブラコを仕留めて１２８０点をたたき出した。湯浅氏の会を愛し献身的に尽くす気持ちに報いようと、海の女神テティスがこのアブラコに命を捧げよと告げたのだろう。

準優勝の矢根氏は、彼が得意とする歌島平盤に入った。私よりずいぶん先輩になるが、若々しい体力は健在で、およそ２㎞にもなる海岸沿いを歩いて、大アブラコに良形ホッケを射止めてきた。何でも狙いの場所にはマイカー組が陣取っていたが、歌島の主を自認する彼は知り尽くした平盤の溝を丹念に探っていったのだ。

島川氏は山中の崖を下りて行った。彼は他会でも名の知れた強者で船釣りをも熟すが、流石の名手ぶりを発揮して三位に食い込んだ。我が会では前野氏、岡氏が八位、九位と食い込んだ程度で、目ぼしい成績は収められなかった。次回、第三回大会での奮闘を期待している。

さて、岩見沢市を拠点とする二つの釣り会の交流が実現したわけだが、ただ単なる交流に終わらせてはならない。各地の「釣り会」の会員が年々老齢化し、その減少傾向に歯止めがかかっていない。岩見沢市からは、全道レベルの傑出した釣りの名人級を輩出している。また、岩見沢市周辺には多くの釣り愛好家がいるが、個人レベルでの釣行となっているのが現状だ。釣りを愛し、仲間を愛し、そして自然を愛するもの同志がこの交流を通して学んだものを、今後の「釣り会」の活動に生かしていきたいものだ。そして、六月の襟裳の海原では新たな大物との戦いを繰り広げ、仲間としての絆を更に深めていきたいものである。「釣りっていいなあ！」「仲間っていいなあ！」「竿先を揺らす大物の気配を仲間と共有し、極上の人生を謳歌するのだ！」

札幌竿道会大会

六月一日、札幌竿道会の大会に参加させてもらった。冬島から油駒までの範囲なので、山中、日勝大和、東歌別、油駒を釣り場候補に挙げておいた。山中はある程度の経験はあるが、この周辺の釣り場に会長が得意とする琴似も含めてみようという思いがあった。日勝大和は、仲間の堀内氏が大物アブラコを仕留めてくるところだが、昨年一度竿出しており、もう少し釣り場の状況を確かめたかった。油駒は、六月の第三週に釣遊会・とんとん会合同大会を控えて、事務局長の責任上、終点の油駒まで案内する必要があることも想定してのことだ。交綸会の岩本満氏が得意としたところだ。しかし、結局、この時期の大釣りが忘れられなくて東歌別で下りてしまった。

大会当番である柴田氏の流暢な進行でバスの中は華やいだ雰囲気で襟裳に向かった。そして、柴田氏が大会運営の確認をしている最中にＨ氏がマイクを握った。三日前に生まれ

たお孫さんのお披露目と日常の竿道会への熱き思いを語った。少しお酒がまわっていたらしく、すこぶる饒舌なものだった。前回、私が乗せていただいた時に竿を忘れてしまった彼が、友人から借りた一本の竿で入賞したことを話すと照れ笑いで応じた。彼はその後も飲み続けたらしく、後部座席の方から武勇伝が響いてきていた。

日を跨いだところで東歌別に着いた。実はバス停を一つ間違えて、中歌別で下りてしまったのだ。何度も通ったところなのにこの有り様である。慌てて東歌別まで歩いていったのだが、各舟揚場には既に釣り人が入ってしまっていた。正面の舟揚場には潮鱗会、手稲フィッシングクラブの二名、右の舟揚場は北の釣会、その向こうの舟揚場には四名が竿を出していた。留吉の沢までの各舟揚場も釣り人がびっしりと入っている。仕方がないので、防潮堤の上から溝なりに打つことになった。ゴロ天秤ネット仕掛けを近投。ゴロネット仕掛けを中投して様子を探るが、全くアタリが出ない。これだけ打っても出ないということは近くにカジカはいないということなのだろう。

一本を遠投に切り替えた。薄明るくなってきた三時ころ、その遠投の竿に、アブラコを思わせる大きなアタリが出た。防潮堤の上からなのでそのアブラコが右へ左へと泳ぐ姿が手に取るように見える。キリキリとリールに悲鳴を上げさせ、竿を大きく曲げながらドスンと防潮堤の上に取り込んだ。この日の頭となった４８㎝ほどのアブラコだった。

二本を遠投に切り替える。本日二度目になるアタリが出た。ハゴトコを思わせる小さなアタリだったが、竿尻で待ち構える。またまたエサを突くような小さなアタリが出たので、今度は竿を手に持ち次のアタリに備える。なにせ、アタリはまだ今日二度目なのだ。慎重にならざるを得ない。しばらくその状態で待っているとようやくグックと竿を抑え込むようなアタリが出た。合わせを入れると、また先程のようなアブラコが、右に左にと泳ぎながら上がってきた。４５㎝ほどのものだった。

三本とも遠投にした。二本バリでは届かなかった沖に見える岩の周辺を狙って一本バリをフルスイングした。思った以上に距離が伸びて岩の向こう側に仕掛けが入った。魚が掛かってもその岩に根掛かりしてしまっては、取り込むことが出来ないとだろうと思い、投げ直そうとすると、すぐにゴンゴンとアタリが出た。掛かった。そして、その魚はなぜか岩の上にすんなり上がって、こちらへと頭を向けてくれた。４０㎝ほどのカジカだった。右方向の岩盤の駆け上がりに打ち込んでいた竿に小さなアタリが続いていたが、そのうちに静かになってしまった。エサを付け替えようと竿を煽ると、なんだか重たい。これも４０㎝ほどのカジカだった。

この時間帯になると防潮堤の縁を軽トラが引っ切り無しに通るようになった。その都度運転手に頭を下げていると、そのうちの何人かが車を止めて話しかけてきた。どれも「釣れねえべ」というものである。海水が冷たくて昆布の育ちも悪く、真ガレイやタカノハを狙って網をかけても、たまにカジカやアブラコが入るだけでさっぱりだというのだ。

五時ころより二時間、アタリは全く出ていない。隣の舟揚場に入っていた「北の釣会」の御仁に様子を聞きに行った。暗いうちは分からなかったが、彼は私のことを覚えていて

下さった。「北の釣会」の関口氏だ。本日は潮鱗会に乗せてもらったそうである。私が十年も前に、初めてせたな町中歌にある「くの字平盤」に乗ろうとしたが、波が高くてその平盤を見つけることが出来ずに右往左往していた。その時に、舟揚場でカジカを狙って竿を出していた御仁が関口氏であり、親切に「くの字平盤」を教えていただいたのだ。彼のバッカンを覗かせてもらうと私と同じような釣果だった。

「北の釣会」関口氏

今日は十一時半が最干潮なので通常より一時間延ばして十一時締切となっている。狙いの盤に乗れるようになるのは九時頃なので正味一時間半の釣りとなる。自分はこの付近にいる誰よりも先に出て一等席をと考えていたのだが、関口氏とその仲間も私と同じ盤に乗ることを考えていたらしい。しかも、狙う方向が同じなのだ。しかし、彼らは私が乗る盤とは違う盤に出て行った。早いうちから私がその岩を目指していると言っていたものだから譲ってくれたものと思われる。

八時、竿を片付けて渡る準備をする。八時半、まずは竿袋だけを担いで前の岩に渡ろう

とした。しかし、その時になってスパイクを忘れていることに気が付いた。岩の前の溝が一番浅くなっている目印となるポコン岩と平岩の間から、昆布の上を滑りながらもストックを突いてすり足で慎重に渡った。そして、竿と仕掛けを竿袋から出し、後はエサを付けて振り込むだけにした。それからもう一度平岩に戻ってリュックを担いで渡った。この時間になると深溝は股下一歩で渡れるようにまで引いていた。潮は刻々と引いているのだ。あと一時間半。これからでもアブラコが頻繁に竿を揺らすだろう。近投ではカジカも・・・。

しかし、アタリは全く出ない。離れ岩に渡ってから瞬く間に一時間半が経ってしまった。未練がましく出していた最後の竿を片付けて、喘ぎ喘ぎながらバス停に辿り着くと、先に関口氏たちは上がっていた。せっかく譲ってくれた離れ岩でアブラコは全くいなかったと話すと、関口氏は先に出てからアブラコ一本取れて審査既定の魚は揃いましたと嬉しそうに話してくれた。

審査は様似漁港で実施した。優勝は留吉で竿を出した山口氏で１４０５点の成績だった。身長賞は山中に入った矢根氏でアブラコ５１．２㎝だった。私はなんとか１２７９点で五位に入賞させていただいた。

筆者の釣果

何とか５位に入賞した